

## 子育てで悩んでいる保護者との人間関係づくり

### 1 はじめに

「子育ては、親育ち」といいます。子どもが生まれたその日から親になるわけですが、人は生まれながらに親としての資質を備えているとはいえません。子どもの泣き声に応えて、様々な世話をします。わが子を胸に抱き、体温を感じながら、新しい技や知識を獲得して本物の親へと成長していきます。そして、「この子の親になったから素敵な感動を経験できた」「この子のおかげで友達が増えた」「この子がいたから賢くなれた」などと何年か後になって子育ての楽しさや苦しかった過去のことを語り合うことができるのです。

しかし、どれだけの人の子育てをじっくり味わい、喜びや楽しみを感じることができているのでしょうか。情報の洪水と核家族、地域での人と人のつながりが著しく減少する中で、子育てが楽しいというより、不安な気持ちでいっぱいになり、わが子を前にして悩む保護者の訴えをよく耳にします。

「悩むということは子育てを真剣に受けとめている証、悩まないよりうんと素晴らしいこと。」「そうやって、子どもがあなたを親に育ててくれているのですよ。」などと語り合いながら、保護者との信頼関係を築き、子育てに自信がもてるよう共に考えていきたいものです。

### 2 悩んでいる保護者たち

#### 事例1 就学前までは、この子に合わせてゆっくり育てようと思っていたのに・・・

授業参観の数日後、お母さんは担任に相談するため来校されました。

うちの子は、何でもゆっくりペースでやってきました。確実に力をつけてきました。だから、この子のペースを大切にして見守っていこう。そう考えてきたのに、目の前のわが子と他の子を比べてしまい、イライラしてしまいます。つい、口調が強くなったり、叱ったりする自分が情けないんです。

#### (お母さんへ)「この子は、今生き生き楽しそうにしていますよ。」

じっくりと3時間ほど話を聞いた担任は、お母さんの子育てに対する基本を称えました。就学までの6年間、子どもはそれぞれの家庭や地域で生活しています。一人一人が獲得してきたものは違いがあっても当然なのです。

今の姿を受けとめて、一つ一つ新しい力を創り出すための挑戦をしていきましょう。今、友達と一緒に登り棒に挑戦したり、虫の本を見ながらお喋りしたり、とても生き生きしていますよ。



## 事例2 基本的な生活習慣が定着しない我が子のことが心配

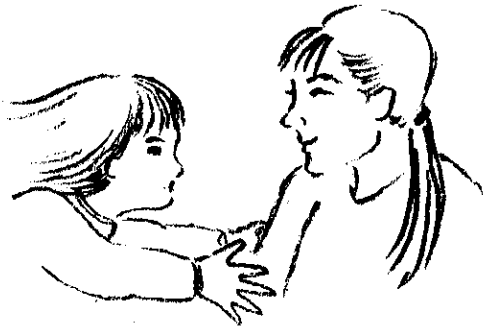
忘れ物が多いので、度々先生から連絡があります。参観日で学校へ来た時、机の中をチェックすると、日付が過ぎたプリントが次々出てきます。

宿題をやるうとして、忘れ物に気付き、学校まで出かけることもしばしばです。朝は、早く早くの掛け声で登校班の列にかろうじて並んでいます。自分でやれる子になるのでしょうか。親としてどんな働きかけが必要なのでしょう。

### (お母さんへ)「子どもがやることを見守ることができていますか。」

幼児の頃、「一人でやる、一人でできるもん」と言い張る子ども。大人はどんなふうに対応したのでしょうか。「こぼしてしまうからダメ」「あなたにはできないわ」「危ないから触っちゃダメ」の言葉の連続。大人の真似をしたくてウズウズしている子どもの意欲を次々と奪ってきたのではないのでしょうか。

躰にはチャンスがあります。でも、今からでも遅くはないですよ。一つ一つ丁寧に本人に気付かせ、目標をもってやり抜かせ、やり遂げたことを自信と力にしていきましょう。子どもがやることはたとえ不十分でも、じっくりと見守りましょう。その場を取り繕ったり世間体を案じていては、力をつけることはできません。「お母さんも小さい頃は、うまくできなかったよ。」などと共感の声をかけることができれば素敵ですね。



## 事例3 友達と遊ぶ姿をあまり目にしません。友達ができないのでしょうか。

学校から帰ってからは、ほとんど外に行きません。家の中で何かするわけでもありません。友達と遊んでくるように声をかけると「約束していないから遊べない」「友達はスイミング」などと口実を並べます。参観日の様子を見ていても、友達との関わりは少ないように思うのです。

### (お母さんへ)「やがて、友達が一番という時期がきますよ。」

友達と関われないでいる子どもには、自分勝手をしたり乱暴な行動が多くて回りの子どもが敬遠するタイプ、まだ回りの友達に中で安心して自分を出せないために積極的に関われないタイプとがあります。Aさんの場合は、後者のようですから、家族の中で或いは家族ぐるみの付き合いの中で、安心して自分が出せる体験を積み重ねたいものです。同年齢の中で安心できるまでには、まだ時間が必要です。じっくりと大人との関わりをつくり、やがて友達の中で自分が出せるように一歩ずつ進みましょう。

#### 事例4 友達とのトラブルが絶えません。親子で頭を下げることに疲れて・・・

だんだんやる事が乱暴になります。相手に怪我をさせてしまうことがとても心配で、いっそ家の中で過ごしてくれた方がと思うこともあるのです。

#### (お母さんへ)「この子がもつエネルギーを活かしたいですね。」

誰かと関わり合えば、トラブルが起こることもあります。何かに働きかければ、過ちもあります。このようにエネルギーを一杯持った子どもなのです。具体的なトラブルの内容について考えることが大切です。頭ごなしに叱りつけるだけでは、生活は改善できません。本人に向き合って、言い分をきちんと聞くことが大切です。その上で、やったことについては、何がいけなかったことなのか、一緒に考えさせたいものです。

さらに大切にしたいことは、この子が暴力や暴言などをどこで、或いはどのように学習しているかです。テレビやゲームからという場合が多くあります。家族の中にも学習源があるとしたら、すぐに取り除かなければなりません。

#### 事例5 反抗的になりました。今まで素直に何でも聞いてくれたのに・・・

家の仕事をよくやってくれる子どもでした。しかし、最近では返事はしてもすぐ行動しないとか、妹や弟に仕事を押し付けるとかしています。そのことを注意すると、とても反抗的になります。一時的なものだとよく言われますが、なんだか心配です。

#### (お母さんへ)「反抗するのは成長の証、うまく付き合っ乗り越えましょう。」

3歳未満までに第1反抗期があるといわれます。そして、思春期の第2反抗期。その中間あたりの時期にもその姿が見られます。第1反抗期には、いやいやを連発したり、要求が通らないとひっくり返って泣き喚きます。口答えが頻繁になるのは、中間での反抗の姿の現れです。

第2反抗期には体の成長が著しいこともあり、時として暴力的な反抗になることもあります。小学校段階での口答えは、自発性が順調に発達しているのとらえたいものです。口答えに対して親の権威だけで解決しようとすれば後になって後悔することにもなりかねません。

#### 事例6 本当のことを言ってくれないように思います。とがめると、ますます口をつぐんでしまいます。

#### (お母さんへ)「ゆっくりじっくり心開くまで待つ姿勢、根気よく話しかける姿勢を大切に。」

本当のことを言いたくないということは、大人の私達にもよくあります。子どもが、今なぜ本当のことが話せないのかを考えてみませんか。

「本当のことを言えば、さらに叱られるのではないか」「友達に迷惑にならないか」「疑われたことに腹が立つ」など、大人が子どもの気持ちを受け止めて、子どもの気持ちに共感し「あなたの力になるよ」という姿勢を示した時、心を開くのではないのでしょうか。子どもの心の内側から鍵がかかっているのです。無理に心をこじ開けようとしないで時間をかけて話していきたいものです。

### 3 保護者の悩みや不安はどこから

#### (1) 便利だけれど孤独な生活

「先生、私、プール当番の日、都合が悪いのです。どうしたらいいですか。」夏休みの直前、電話での相談でした。「どなたかに替わっていただけませんか。先日の説明会でお話ししたように、個人で話し合い、変更の際は学校へ連絡をいただくことになっていますが。」「誰に替わってもらえばいいのですか。私は誰も知らないのです。」「ご近所の方とか、同じ学級の方とか、当番表を見て連絡をされてはどうですか。」「同じクラスの人も知りませんから」「じゃあこちらで分かりますから」と何人かの名前を伝えました。

このようなことは、特別なことではありません。「プール用具を入れる袋はどんなものがいいですか」など近所の人に尋ねたり、回りの子どもの様子を見たりすれば、すぐ分かりそうなことまで、学校を頼りにされる場合が増えています。言いかえれば、家庭と家庭とのつながりや地域の中でのつながりが次第に希薄になり、それぞれの家庭が孤立していることを強く感じます。

#### (こんな時代もありました)

子どもを連れて公園に出かければ、子どもにもお母さんにも新しい友達ができ、生活の幅が広がっていきました。幼稚園や保育所でさらに交流の輪が広がりました。小学校に入学すれば、また新しいお付き合いが始まりました。

しかし今では、意図的な働きかけが必要なほど孤立化の現象が増えています。そんな中、自分一人で子育てをすることに不安を感じ、悩んで暮らす保護者も少なくないのです。

#### (2) 溢れる情報の中で我が家の子育てが確立できない。

子育ての情報が氾濫しています。様々な情報に振り回されることも少なくありません。また、少年犯罪が起きるたびに子育てのあり方が話題になり、保護者の不安は広がります。子育てに関しての主体的なビジョンが各家庭で持てず、悩みが増大することもあります。

#### (3) 少子化・核家族化がすすみ、子育てをサポートしてくれる人がいない。

子どもから距離をおいて育てることが大切なきががあります。しかし、少子化の時代を反映して、一人の子どもに両親が必要以上に関わり過ぎてしまうことがあります。過度の干渉をされる子どもの大変さ、圧迫感を理解しているでしょうか。逆に、出番があるのに姿を見せない父親のため、子育てが母親任せの家庭もあります。一人親家庭で子育てする人も増えています。

子育てが家族任せとなり、周囲からのサポートが少なくなっています。このため、子育ての悩みを抱えている人が、年々増加傾向にあります。



#### 4 悩みや不安などについて一緒に考えながら、保護者との人間関係を築く

子育ての支援施策が様々なかたちで進んでいます。文部科学省は『家庭教育ノート』を配布し、各家庭の子育てのヒントにするように呼びかけています。巻末には、情報提供・相談の窓口なども紹介しています。地域では、各種の団体が子育て支援事業を計画し、参加を呼びかけています。

学校は、保護者にとり最も身近な情報提供・相談窓口になれる要素をもっています。したがって、様々な保護者のニーズに応じて支援できる力量をつけることが必要です。

##### (1) 保護者の子育てに共感し、不安な課題をともに考える。

###### ① 保護者の悩みや不安にじっくり耳を傾ける。

「基本的な生活習慣が身に付かない」「学習に遅れがある」「友達とうまく関われない」「言うことをきかない」「いじめられている」などなど、保護者は日常の子どもの様子から、様々な不安を持ち、教師に相談をします。そんなとき、教師は聞き役に徹することがポイントです。保護者の話が抽象的な場合は、具体的な話になるように配慮しましょう。教師にじっくり話を聞いてもらえると、保護者はとても安心します。

###### ② 子どものよさを伝える。

子どもの生活について、悪いことばかりに目が向いている保護者がいます。よさに気付いてもらうことが必要です。よさに目を向けることは、視野を広げて子どもを見つめことになり、自分の子育てに自信をもつことにもなるからです。

子どものよさを伝えると、保護者はほっとした表情をされます。そして、「そういえば、こんなことがありました。うちの子にも取り柄はあるのですね。」などと、話してくださいませ。

###### ③ できることから具体的に行動を

保護者は、今の子どもの状態を何とか変えたいと願い、相談をされています。ですから、具体的な行動の仕方を提案することが必要です。ここで大切なことは、子どもと一緒に行動の計画を考えることです。そして、教師は機会あるごとに、子どもの成長の様子を伝え、保護者と共に子育てに参加している姿勢を示すようにしましょう。そうすれば、保護者は徐々に安心をし、子育てにもゆとりがもてるようになります。

##### (2) 保護者と共に、親子関係の夢と希望を語り合う。

###### ① 親子の関係さまざま

Kさん親子の話です。

最近、こんな光景はすっかり減ってきました。親と子どもの生活リズムが違い、食事まで一緒にできないことが多くなっています。子どもの部屋があり、一家に複数のテレビがあり、時間や空間を家族で共有することも少なくなっています。したがって、親子の会話は極端に減ってきています。

そんな中で「子どもが何を考えているのか分からない」などの不安を感じている保護者が多いこの頃です。

一方、「我が家は友達家族です」とか「親子と言うより姉妹のような関係です」と言い、「子どものことは何でも理解している」「子どものつまずきは、親の私を取り除いてあげなくては・・・」と考えている保護者もいます。また、保護者自身が体験した親子関係（子どもは親に従うもの、文句を言おうものなら手が出る）を、そのまま引き継いだ保護者もいます。

毎晩 川の字に並んで 絵本を読んだ  
スポーツに汗を流し  
食事づくりもいっしょ  
おしゃべりいっぱいにぎやかな夕食  
テレビのアニメを見て 思わずポロリ  
中学生になったら  
音楽や文学、時事問題に  
一人前の口をきく

## ② 日頃から家庭のことや親子関係を話題にしよう

問題行動が起きたとき、家庭生活や親子関係が話題になります。教師は日頃から、通信や保護者との語りにおいて、家庭の在り方や親子の在り方を話題として取り上げたいものです。書物を紹介することも有効なことです。教師自らが生き立ちや家庭生活などについて語ることもよいでしょう。成長の過程や失敗経験などについて、保護者と一緒に考える材料を示していきましょう。

## ③ 子育てに見通しをもち、夢や希望がもてる支援を

粘り強く子どもと関わるができるように保護者を支援することが、教師にとって大切なことです。

- ・ 子どもの実態を丁寧に把握し、保護者と共通理解に達すること
- ・ 子どもの発達課題を明らかにし、保護者と共有すること
- ・ 子どもの発達課題に見合う親子の在り方について考え、アドバイスすること

特に、現時点での子どもの実態把握が保護者と一致しない時には、細心の配慮が必要です。相手の生活や子育てを十分評価しながら、次の課題を示していきたいものです。

保護者自身の生き方の中に子育てを位置付け、素敵な親子関係づくり、共に育ち合える親子関係づくりを支援していきましょう。支援の具体的内容としては、読書の奨励、講演会への参加、文化行事への参加、奉仕活動への参加など、多様な活動を紹介していきましょう。

## (3) 保護者も仲間のなかで成長できる。

### ① 保護者の仲間づくりの実態

保護者は、子育ての情報を誰から手に入れているのでしょうか。多くはメディアからです。仲良しのママさんグループを持っている人はわずかです。多くの場合、限られた狭い範囲の情報に支えられています。

我が子のマイナス評価に関わることは、人に知られたくないものです。とりわけ、子どもが問題と思われる行動をしているときなどは、親しい仲であった人とも疎遠になりがちです。

援助を必要とする家族が孤立しないように、日頃から子育ての仲間づくりをしていきましょう。地域の子育て支援の事業などに積極的な関わりがもてるように、教師は橋渡しの役割を果たす必要があります。

### ② 地域社会のみinnで子育て支援を

子どもは、次代の地域社会を継ぐ宝です。地域社会全体で子育てをしようとする機運が高まり、様々な取り組みや働きかけが始まっています。校区の子育て支援施設は、質量とも充実の方向で進んでいます。子育て支援事業が、公民館や保育所をベースに実施されています。子育ての相談機関の数も増えています。

公的な取り組みを大切にしつつ、身近に支援し合える関係を築いていくことも大切です。

「悪いこともやりながら、子どもは成長するんやよ。親が精一杯働いとるのを、子どもは見とる。そのうち分かる時がくるよ。絶対見放したらあかんよ。」子育てで手を焼いていたときにもらった、Bさんの言葉が嬉しかったとAさんが教えてくれました。

「うちの子のことを、Hさんのお母さんはよく分かってもらえる。言葉をかけてくださり、半年ぶりに友達の家遊びに行くことができました。優しいお母さんがおられて、親子ともども嬉しいです。」不登校傾向のMさんのお母さんが話されました。

地域の支えの大きいものです。よい関わりを紹介し、望ましい関わりがさらに広がるようにしましょう。

#### ④ PTA活動を通して保護者の仲間づくりの輪を広げる。

学級懇談会を生かして、お母さん同士のつながりを強くすることもできます。お母さんは、知恵を絞って子育てをしています。その知恵を交流することで、互いのよさに気づき、認め合える保護者同士の関係が育まれていきます。

(懇談会の緊張を緩めるのに、仲間作りゲームなどをするのも一つの方法ですね。)

お互いの信頼感が深まり、困っていることや悩みなども相談できる懇談会になるといいですね。一緒に考えてもらえる仲間の存在は、お母さんの心の負担を軽くしてくれます。また、よきアドバイスは、お母さんの子育ての支えになると同時に、子どもの生き生きとした姿を生み出すことにもなります。

